

# 26P-pm231

理礼氏薬物学(第十一卷)にみる薬物

○大垣 旭<sup>1</sup>, 小松 知貴<sup>1</sup>, 島 和嗣<sup>2</sup>, 久保 光平<sup>3</sup>, 畠山 貴博<sup>4</sup>, 小松 直登<sup>5</sup>, 木村 壮太郎<sup>6</sup>, 澤田 采佳<sup>7</sup>, 西野 ゆり<sup>8</sup>, 林 優樹<sup>9</sup>, 西野 正雄<sup>10</sup>, 菰田 綾佳<sup>11</sup>, 宮本 如奈<sup>12</sup>, 高倉 弘士<sup>13</sup>, 畠山 有理<sup>14</sup>, 畠山 光弘<sup>15</sup>(<sup>1</sup>府立河南高校, <sup>2</sup>府立金岡高校, <sup>3</sup>四天王寺羽曳丘高校, <sup>4</sup>初芝富田林高校, <sup>5</sup>府立東住吉高校, <sup>6</sup>府立藤井寺高校, <sup>7</sup>府立西浦高校, <sup>8</sup>府立長野高校, <sup>9</sup>府立富田林高校, <sup>10</sup>早稲田大学(基幹理工), <sup>11</sup>関西福祉科学大学, <sup>12</sup>同志社大学(文), <sup>13</sup>立命館大学(産業社会), <sup>14</sup>長崎大学(薬), <sup>15</sup>畠山獣医科)

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十一巻全文を解説し紹介する。

「内容」・・巻十一巻では変質薬を扱っている。沃顛(沃顛丁幾、沃顛軟膏) 沃顛ポタシウム(複方沃顛丁幾、複方沃顛軟膏、複方沃顛水)、希沃顛水素酸(沃顛アンモニウム、沃顛ソジウム、沃顛澱粉)、砒石、亜砒酸(白砒石)、亜砒酸ポトアス水(ホールル氏水)、亜砒酸ソーダ水(ヘルソン水)、亜砒酸アンモニア水(ビート氏砒石水)、沃顛砒石、沃顛汞加砒石(ドノグァン水)、プロミニウム、プロモポタシウム、クロロ、含クロロ石灰(クロロ石灰)、含クロロソーダ水、クロロカルシウム、クロロバリウム、塩酸アンモニア(鹼砂)、クロロ酸ポトアス、亜硫酸ソーダ、加マンガン酸ポトアスそして砒石の中毒作用は、胃腸の炎症、抑圧症などがある。中毒に対し第一選択は吐薬で、第二策は十分な量の抱水一半酸化鉄の煉ったものを服用する。主な検毒法は、溶液にポトアスあるいはソーダを加え熱し、砒石を還元させる方法。第二の方法はレーンス氏の方法で、疑わし溶液に塩酸を加え煮沸し、銅線に砒石の膜が出来、その膜を再度還元試薬で試験を行う。

「考察」・・亜ヒ酸は白砒または砒霜と呼ばれ、わが国でも毒薬としての亜ヒ酸の歴史は古い。幕末から明治にかけて「石見銀山鼠取り」の名で亜ヒ酸(砒霜)が売り出された。但し、このヒ素は石見銀山ではなく、津和野町の笹が谷銅山から産出されたものであった。当時、砒素による中毒が問題であったことが伺いしれる。